

第7章 おわりに

調査研究事業報告にあたって

今年の4月中旬より、中小企業診断協会新潟県支部の企業内診断士活性化委員会に於いて、この事業に着手して以来、既に、8ヶ月有余の歳月を経て、各メンバーの努力と協力により、ようやく結びの段を迎えるに至った。その間、各章の調査、検討、執筆に至るまで、ほとんどの担当者が企業の現役あるいはプロコンであったがために、それぞれが文字通り多忙の時間を縫っての作業であった。文字通り担当者全員の汗の結晶がやっと、その陽の目をみた次第だ。アンケート、調査に際しては、郵送班と訪問班の二班に別れての情報の収集に当たった。訪問班の担当者の方々は、本来の職務の合間を縫っての調査活動だった。又、報告書のまとめに際しても数次の会合と電子メールによる情報交換を通じて行われ、根気を必要とする作業であった。

報告にあたり、まず、調査に際して、ご協力を頂いた企業並びに関係各位に対して、この場を借りて深く感謝を申し上げることとする。

この報告書を読んで感じることは、時代の推移と共に企業を取り巻く環境は、常に流動的であるが、その変化が最近はとみに著しいという事だ。更に、その環境の流れの方向を変えようとする法的規制措置、つまり今回の調査では「個人情報保護法」、更に、「不正競争防止法」のことであるが、企業経営者は否が応でもその対応を迫られている。しかし、前章までの調査結果にある通り、多くの経営者は、知識としての対応は持っているものの、具体的な対応となると、何処から着手すべきか、二の足を踏んでしまうのが実情の様だ。

一つには行政側にも、その対応の不足が指摘されるのではなかろうか？単に、立法措置だけで、事足りりとしているのではないだろうか？日々多忙な中小企業経営者に対しては、もっと懇切丁寧な血の通った指導体制の整備が必要不可欠なのではないだろうか？そのためには、社団法人中小企業診断協会を始めとする関係諸団体に対しても、法の趣旨の浸透を計る必要がある様に思う。

古来、「商売には、ヒト、モノ、カネ」の三つが必要と云われているが、従来は、それら三要素のさらに奥にある「モノ」が等閑視されがちだったのだ。その「モノ」が「情報」なのだ。いくら、ヒトがいて、モノがあって、おカネがあっても、その運用を誤れば、企業は、忽ち倒産の憂き目を見る。その運用方法は以前には、「経営のノウハウ」と言われていたが、最近のコンピュータの進化、発展により、経営における情報・データの重要性の度合いが、比較にならい程に重きをなすに至った。ところが、情報の重要性が増すに従って、困った事に情報が一人歩きをしはじめた。一旦、情報が歩き始めると、つまり情報の漏洩があると、その情報は削除が不能で、何処に、誰が、何時、どうして、何の目的で利用されても、弱者の一般の人々は、全く防御の術を持っていない。しかも、情報は容易に持ち運びが出来る。それが唯に、取り扱いも時として粗末にされ易いが、その漏洩した情報が、思わぬ深刻な事態を招き兼ねない。最近の金融機関の名

簿の漏洩、警察の取り調べの個人情報の取り扱い問題等、報道機関に於いて枚挙にいとまがない。したがって、情報の管理運営には細心の注意が要求される。

更に、情報が将来の経営を左右するにも関わらず、中小企業の経営者は、情報の収集や活用において著しく不利の立場にあり、そのために、情報量の多寡が企業間格差などに現れている様だ。今回の調査からも感じ取れるが、それは、一口で言えば、「情報の二極分化」の現象であろう。しかし、この二極分化の現象を他人事と、中小企業の経営者は認識しているフシがあるかもしれないが、果たしてそう考えていてよいのだろうか？例えば、以前の大規模小売店法の規制緩和が、旧来の商店街に何をもたらしたかは、昨今の郊外の大規模店舗の繁栄に比べ、旧市街の衰退の実情が雄弁に物語っている。「たかが法律、されど法律」。今回の調査活動を通じて、改めて企業経営の難しさを思い知らされた次第である。それと同時に、変化を恐れず、積極果敢な経営者の支援について考えるとき、我々中小企業診断士の役割を思い知らされた感じがする。

謝辞

本調査研究は、社団法人中小企業診断協会新潟県支部の平成18年度調査研究委員会が平成18年度マスターセンター事業として実施したものである。調査の性格上お名前は伏せさせていただくが、ご協力をいただいた企業、法人の方々に改めて深く感謝を申し上げます。また、社団法人中小企業診断協会本部並びにご支援と情報提供をいただいた新潟県支部会員の多くの皆様、特に企業内診断士活性化委員会、渡辺力、渡辺芳久の両氏に対して感謝を申し上げます。

社団法人中小企業診断協会新潟県支部

平成18年度調査研究委員会

委員長 渡邊清史（1、2、3、4、6章、付録担当）

副委員長 赤塚浩一（サマリー、1、2、3、5章担当）

塚田元博（2、7章担当）

鳥羽章夫（2、3、4、6章担当）

中村公哉

前原俊宏

山崎 勉（2、3章担当）

渡邊 聡（2、3、4章担当）